

通信制高校における中高年学習者の学びについての考察

— 都立A高校における事例を中心に —

A consideration about the learning of middle and old age students at
correspondence course high school

上野 昌之

UENO, Masayuki

本稿は通信制高校における中高年学習者の学びについて考察する。中高年学習者は年を経て高校に入学・編入学し、様々なハンディーがあるにもかかわらず、学びに対する姿勢が真摯で、学習意欲が高く、学校活動への参加も積極的で、他の生徒などにもたらす影響が大きい。現在の通信制高校を考える上で重要な位置にある。では、彼らにとって通信制高校で学ぶ意義とはいかなるものなのであろうか。本稿では都立A高校通信制で学ぶ中高年学習者へのアンケートを踏まえ、中高年学習者の学習態度、学習意識、学校生活のあり方を明らかにし、学びの意義を考える。そして、生涯学習の観点から通信制高校での中高年学習者の学びのあり方をとらえなおしてみる。そこからは、中高年学習者が積極的に学習・学校活動を行う中で、学校に自らの居場所を作りだし、人間的な成長と人生の統合を追求する主体的な学びの姿勢が看取される。

序

通信制高校には様々な生徒が学んでいる。現在の通信制高校は、高校中退者の受け皿として、また中学、高校で不登校になり全日制に通えないものの進学先として機能している。そのほかにも持病や障害で通学制に通えないものや、近年公立では家庭の経済的な事情により進学するものも増えている。また、通信制高校は全日制の高校とは異なり学習者の年齢層に幅がある。一般的な高校生年代の10代後半を中心に、成人すなわちすでに社会で仕事をしている年代までと幅が広い。その中で本稿では中高年学習者に目を向けることにす

る。中高年学習者に焦点をあてるのは、彼らがすでに学校生活から離れて久しく、あらためて勉強を始めるには年月が経っており、学習するということに対してはハンディーがあるが、学びに対する姿勢は真摯で、学習への意欲が高く、学校活動への参加も積極的であるからである。つまり学校活動へのかかわりが大きく、学校や学習への意識が極めて高い人たちで、通信制高校での学びを考える上で彼らを抜きにしては語るができないからである。

現在の通信制高校は生徒の若年化に伴って、学校としての役割が変わってきている。全日制課程からの転編入者が多いことからわかる

キーワード：生涯学習、通信制高校、中高齢者、居場所、統合

Key words : lifelong learning, Correspondence course high school, middle and old age, ibasho, Integration,

ように、学習指導の充実や細かな生徒指導が求められるようになってきている。今日的な生徒は受動的な側面が強く、自律性に乏しい傾向がある。学校活動の停滞が起り、その反面で学校側の指導が強まっているといえる。こうした中で中高年学習者は、消極的な生徒の援助や学校活動の指導的な役割も果たしている。一般生徒と一緒に学習活動をおこなったり、ホームルーム活動や生徒会活動に参加したりすることでもたらされる影響も大きい。通信制高校での中高年学習者は数的には少ないが、その存在は決して小さなものではない。

さて、一般的には中高年の学習は生涯学習の範疇でとらえられる。生涯学習は自由意志に基づき自己の成長発展と充実、また職業上の能力の向上などを求め、個人の目的に応じ自己実現の意欲や自発的学習の意欲を自主的・主体的に伸張させ、生涯にわたって学び続けることとされる。では、通信制高校で学ぶこととはいかなるものなのであろうか。学びの場を学校教育の中に求め、学校活動をおこなう彼らの思い、学びの意義を明らかにしていきたい。

そこで本稿では、東京都立A高校通信制で学ぶ中高年学習者へのアンケートを踏まえ考察を行う。第一に当該校における中高年学習者の基本的なあり方と学習態度、学習意識、学校生活のあり方を明らかにする。第二に中高年学習者の通信制高校での学習のあり方をとらえ、学びの意義を考える。そして、第三に生涯学習の観点から通信制高校での中高年学習者の学びのあり方をとらえなおしてみる。

I 中高年学習者へのアンケート

(1) アンケート調査の概要

本アンケート調査は、中高年で通信制に通

う人たちの入学前の状況から入学後の学習、学校活動の状況ならびに教育活動への意識を問うものである。その目的は、対象の学習者が通信制高校での教育をどのように考え、適応しているのか。また彼らが学習活動、学校活動を通して持つこととなった学びの姿勢を考えることで、生涯学習としての通信制高校での学習の意義を明らかにすることである。アンケート項目は、学習者の入学前の状況、入学後の学校に対する考え方、意識の変化を把握するために、次のような観点から項目を選択した。入学前状況把握、現在の学習歴、学習活動の状況、通信制学習への自由意見、学校での諸活動の参加状況、校内活動への自由意見、卒業後の進路希望、入学後の自己変化、通信制高校への自由意見。

本調査では東京都立A高等学校通信制課程に在籍する40歳代から80歳代の学習者を対象とした。調査概要は以下のとおりである¹。

調査時期 2008年11月から12月

配布数 24通

有効回答数 21通

有効回答率 87.5%

調査方法 選択式並びに自由回答方式による郵送調査

(1) 入学前の学歴

中学卒業	高校中退	通信制中学卒	専修学校卒	夜間中学卒	無回答
5	8	4	2	1	1

通信制高校に入る前の学歴には入学生の人生が凝縮されているといっても過言ではない。中高年の場合その学歴を背負って生きてきたわけで、若年層に比べそのもつ意味は深い。家庭の事情から中学卒業後社会に出た人が多

通信制高校における中高年学習者の学びについての考察

いのが特徴である。高度経済成長期にはそうした人々が多数いた。通信制中学²卒業というように終戦直後の混乱期に中学教育を全うすることができずに仕事に就き、生活に追われて生きてきた人たちもいる。また、夜間中学卒業者はここでは外国籍の方である。専修学校卒業は専修学校の高等課程卒業にあたる。

(2) 入学のきっかけ

仕事・資格試験で高卒資格が必要	高校を卒業しなかった	生涯学習として	その他
7	9	2	3

大学などへの進学やキャリアアップのためという回答と純粹に高校での勉強がしなかったという回答が上位にあがった。

(3) 入学前の障害

時間的な制約が大きかったという結果が出た。時間的な制約の内容としては家事や子育てといった家庭的な問題と仕事という社会的・経済的な問題である。少数意見として体調の不具合があがっている。

(4) 入学区分

1年次相当	2年次相当以上
19	2

A高校通信制では入試が行われており、1年次相当と2年次相当以上の2区分に分け選考される。すでに高校で修得した単位数により受検区分が決まってくる。前在籍歴のない人たちが圧倒的に多い。

(5) 受検する上での心配ごと

入試に対する心配事などの有無を問うたが、合格するかどうか入試自体への心配が6件であったのに対し、入学後に勉強についていけ

るかどうかという心配事が7件と上回った。経年による学力不足と異年齢と学ぶ学習環境へ不安が、高校入学前に大きなものであったことが想像できる。

(6) 現在は何年次生ですか

1年次	2年次	3年次
4	7	10

(7) これまで何年間在籍していますか。

1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年
3	5	8	1	1	1	1	1

(6) (7) を並列してみると具体的な学習状況がわかる。A校通信制課程は単位制のため修得単位数により年次が決まってくる。また、最高在籍期間は6年となっている³。このため在籍年数と学年次にずれが生じる。3年間で卒業するとは限らない。自分のペースでゆとりをもち学習をしたい場合や職業に従事している場合などは、在籍年限が延びてくる。

(8)～(11)は学習活動について問うたものである。

(8) 普段の学習時間は一日どれくらいですか (週当たり換算も可)

1時間未満	1～2時間	2～3時間	4時間以上
1	10	8	2

アンケートからはコンスタントに学習している様子が見える。休日しか時間をつくれな場合でも、集中的に時間を確保しているようである。日常的な学習により学習課題に取り組んでいることがこの回答からも裏付けられる。

(9) レポート課題を学習しての意見

・レポートは完成するが、実際に内容を理

解しているとはいえない。

- ・なかなか時間が取りにくかった。
- ・苦手科目がなかなかできない。
- ・質問デーがあって助かった。
- ・丁寧に添削されていた。
- ・模範解答が欲しかった。
- ・夜とか、日曜とか個人指導があるとよかった。
- ・質問に来る時間がないので、貸し出しでいいからNHK高校講座のVTRが見たい。
- ・スクーリングに出席しないとわからないことが多い。

レポート課題は科目ごとに分量は違っているが、1年間に、1通当たりA4版3ページでおおよそ70～80通となる。10教科まんべなく選択することになるため、得手、不得手に関係なく学習しなければならない。新たな科目として学ぶことがほとんどであるため、一人で教科書と参考書を頼りに学習する自学自習という学習方法は、困難が伴う。興味のある科目ならば素直にできるものであっても、難しい教科・課題では手がかなく、学習からの逃避も起きる。そうしたときに克己心を持てるかどうか、修得できるか否かの分岐点となる。

(10) スクーリングに出席しての意見

- ・私語が多く聞きづらい授業がある。
- ・飲み物を飲みながら受ける生徒がいる。
- ・勉強についていくのが必死。
- ・目と耳が不自由なので大変。
- ・一時的に荷物を預けるロッカーが欲しい。
- ・日曜もあるといい。
- ・体育や教室移動のとき階段の上り下りがきつい。

- ・同一授業に何度も出られるようにしてほしい。
- ・コミュニケーションが図れるようなことはできないか。
- ・わからない子でも興味を持たせるような授業の工夫が欲しい。

スクーリングは週一回授業形式で行われ、レポート課題の重要点などを講義する。規定回数の出席が義務付けられているが、それを超えての出席は自由である。中高年学習者は学習内容の理解を求めて、規定回数を超えて出席する熱心な人たちが多く、そういう人たちにとっては、若年層の生徒が出席回数だけを確保しようと形式的に出席し、授業をまじめに聞いていないことに疑問を持っているようである。高齢者の場合、身体的なハンディーが学習や学校活動に大きく影響しているケースが回答されている。

(11) 定期考査を受けての意見（自由回答）

- ・字を大きくして欲しい。
- ・解答箇所をわかりやすくして欲しい。
- ・選択肢がわかりづらい。
- ・ペース配分ができなかった。
- ・復習するがすぐに忘れてしまう。
- ・勉強不足。
- ・出題が多い。時間が足りない。
- ・3期制の方が考査回数が多く勉強になる。
- ・試験範囲の提示を早くしてもらいたい。

学習に真剣に取り組んでいる人たちなので、定期考査を受ける意識も高い。科目により試験形式は違い解答方法が異なるため、それに慣れるのが難しいことがわかる。半期に一回の考査だと出題範囲が広くなり準備がしきれないということが言えそうである。記憶力の

通信制高校における中高年学習者の学びについての考察

低下を指摘し、「理解しているつもりであっても、テストになると答えられない」という言葉をよく耳にする。

(12)～(17)は学校生活について問うたものである。

(12) ホームルーム及びクラス清掃への参加

いつも出る	かなり出る	規定数	あまりしない
10	9	2	0

ホームルームとクラス清掃への参加は、年間10回と規定されている（年間28週間のうち）。そのため、多くの生徒は規定数を満たすだけにとどまる。中高年学習者は規定数を大幅に超え参加している。登校した日は必ず参加するといえる。ホームルームは唯一のクラス活動であり、内容的には学校からの連絡がほとんどであるが、中高年者は質疑などを積極的に行うので、クラスでの存在感は大きい。クラス清掃も熱心に行っており、他の生徒の模範的な役割を果たしている。

(13) 学校行事への参加

いつも参加する	かなり参加する	あまり参加しない	まったく参加しない
8	8	2	3

学校行事には、儀式的行事（入学式、卒業式）、生徒指導的行事（避難訓練、セーフティー教室、生活体験発表会、文化祭、運動会）、進路指導的行事（進路説明会、進路講演会）、生徒会行事（生徒総会、卒業を祝う会）、教科的行事（校外学習等）がある。

(14) 生徒会活動及び部活動参加（複数回答）

部活動	生徒会運動会実行委員	文化祭参加	参加せず
11	5	3	5

(13) (14) の結果から学校活動への参加の

割合が見て取れる。かなりの割合の中高年学習者が学校活動に積極的に参加している。運動会の運営や文化祭での発表活動など、積極的に活動する人たちもいる。しかし、一方ではほとんど参加しない人もいることがわかる。

(15) 入学後、新たに交友関係はできましたか。

できない	1～3人	4～6人	7～9人	10～19人	20人～
3	8	5	3	1	0

(16) 世代間交流

よく話す	まあ話す	あまり話さない	まったく話さない
7	7	5	1

(15) (16) からは、同年代の人たちで交友関係が築かれているが、世代を超えた交友関係をつくっている人も少なからずいるのがわかる。当該生徒には女性が多いことが交友関係の広がりを示す理由かもしれないが、男性の中にも若年層に頻繁に声を掛けている人もおり、その積極性が現れているのであろう。しかし、一方では孤立的な人がいることがわかる。ただし、この人たちは学年次が若いという理由があるかもしれない。

(17) 学校活動全般での意見

- ・自分のクラスとの交流が見つけにくい。
- ・もっとコミュニケーションが取りたい
- ・友人関係を作れるようクラス交流会を開いて欲しい。
- ・友達が作りづらい。
- ・多くの人とコミュニケーションがとれるのが嬉しい。
- ・若い人と違和感がなかった。
- ・世代を超えて一緒に学べる。
- ・先生方がよく話してくれる。

- ・よい友よい先生にめぐり会えた。
- ・行事で交流ができた。行事が楽しかった。
- ・人間関係が複雑ではない。
- ・働きながら学べる幸せ。
- ・経済的にも安く贅沢。
- ・先生方が熱心、先生が丁寧、親切。
- ・高齢者でも勉強できてありがたい。
- ・年齢制限能力制限がなく嬉しかった。
- ・自学自習が身についた。
- ・自己の勉強が出来る。
- ・勉強できるのが楽しい。
- ・時間割が自分で決められるのがいい。
- ・自分の生活にあわせられた。
- ・スクーリング時間外でも質問に答えてもらえる。

学校全般に対する意見を大別すると二つに分けることができる。ひとつが人間関係やコミュニケーションについて。もうひとつが学習についてである。通信制は制度上、限られた日数しか学校に来ないため、人との関係が希薄である。部活や行事などでの関係作りでは限界がある。ホームルーム活動が盛んになればより密接な関係はできるかもしれないが、通信制に通ってくる生徒には経験的にそれを拒むものも多く、強制的に制度をつくるわけにもいかない。中高年学習者がその辺を理解しながらも関係性の必要を求めている。それは若年層のあまりにも消極的、無関心な行動を齒がゆく思っているからであろう。また、学習に関しては学習行為自体を肯定的に捉えていることがわかる。次章で詳しく述べることにするが、彼らの学習要求は極めて高いことが見て取れる。

(18) 卒業後の進路希望（複数回答）

大学進学	通信制大学	専門学校	仕事の継続	新しい仕事	家庭	その他
4	11	1	7	2	0	1

進学希望が多いのが特徴である。向学心が高く将来的な展望を持って入学しているため、早い時点から希望が決まっている。現在の仕事を継続させながら両立できる通信制大学への希望が高くなっている。

アンケートの後半には自分自身と通信制高校についての項目が3つある。①自分自身が通信制高校に通い変わったこと。②あなたにとって通信制高校とは。③通信制高校またはA高についての意見。これらの項目については自由意見でもあるので、次章の論考の中で扱っていくことにする。

以上のように通信制高校中高年学習者へのアンケート結果を概観した。中高年学習者は前在籍から年月を経て、高校を卒業したいという希望のもとに不安を持ちながらも高校に入学、編入学し、学習、学校活動を行っている。職業上の制約や身体的なハンディを背負うものもいるが、継続的に学習活動に励み成果をあげている。学校活動への参加も一般に積極的で模範的である。そこにはこれまで得ることができなかった学習や学校生活への熱い思いが表れていると同時に、通信制に通う多くの若年層に対し、励ましともいえる強いメッセージ性を読み取ることができる。彼らの存在が、今日の通信制高校の中でからし種のように小さいながらも豊かで力強い存在として働いているといえる。さて、では彼らにとって通信制高校での学びとはいかなる意義を持つものであるのか次に考えてみたい。

Ⅱ 通信制における中高年学習者の学びの意義

通信制高校には多様な生徒が学んでいる。中高年学習者もそのうちの一部である。人数としてはさほど多くはないが、毎年一定の割合で入学し、卒業する。高等学校は、学校教育法の設置目的、教育目的からすれば、中学校を卒業した生徒が学ぶ教育機関である。

学校教育法

第50条 高等学校は、中学校における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、高度な普通教育及び専門教育を施すことを目的とする。

第51条 高等学校における教育は、前条に規定する目的を実現するために、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

1. 義務教育として行われる普通教育の成果を更に発展拡充させ、豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと。
2. 社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させること。
3. 個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養う。

青少年に基礎的な知識と考え方を身につけさせると同時に発達課題を達成させ、社会的な形成者としての資質を養う場とされる。年齢も高く、個性も確立し、社会的な役割も果たしてきた中高年の人々の教育機関としては必ずしも当てはまらない。しかし、中高年学習者は通信制や定時制の高校には、少なからず在籍し教育を受けている。果たして、彼らが高校で教育を受ける意義はどこにあるのだろうか。

先のアンケートの入学動機を参照するとその一端が見えてくる。「卒業をしたかった」という高校卒業願望が筆頭にあがる。次に卒業資格の必要性である。ここから考えられることは、これまで何らかの事情で得ることができなかった高校での学習と卒業という区切りが彼らにとって、年を経ても切実な思いとしてあることがわかる。本来なら成長の過程で得られたであろう高校生活を送ることができず、人生の重荷として持ち続けていたのであろう。卒業資格がないことで進学を諦めたり、就職で不利益を強いられたことは想像に難くない。年月が経ってもその思いを拭い去ることができずにいる気持ちが、再び学びを求め高校入学を決断させた要因といえよう。言い換えるならば、人生の補完を求め通信制高校に進学したのではないだろうか。アンケートに即してみれば、彼らにとって通信制高校は以下のようなところととらえられている。

「今まで悔やみコンプレックスもあったが、次に進み、社会・仕事に生かすチャンスを得られるところ」(48歳女性)。「家事のことを忘れて、すっかり高校生にひたれ、ちょっぴり青春に戻れるところ」(75歳女性)。「本来の目的に進むために許された唯一の手段」(68歳男性)。「夢が現実に変えられる場所」(54歳女性)。「夢の入口」(54歳女性)。

彼らにとって高校に入り学習することは、これまでの人生を埋め合わせ、さらにこれからの希望をかなえてくれる道筋と考えているようである。

では、実際の高校での学習は彼らにとってどのような意味があるのだろうか。通信制高校での学習内容は、学習指導要領に規定され

たものである。一般に高校の普通教育を基礎・基本の観点からはじめ、積み重ねていく方法をとる。与えられた教材をカリキュラムに沿って学習していくのだが、多領域にわたる教育内容が計画的に行えるところが学校教育の特徴でもある。効率的に学習ができる利点もある。しかし、中高年学習者は学校教育を受けるにはブランク期間が長く、年齢的なハンディや仕事との並立もあり、学習は容易なものではない。すでに経験から獲得している知識、技能もあるはずであり、成人が生活していくうえで必要となる内容項目ばかりではないであろう。学校教育法の教育目標に鑑みても成人にはすでに不必要な内容項目もある。

成人の中高年学習者にとってあらためて学習する意味はどこにあるのだろうか。先のアンケートには、通信制の利点として「学科の基礎が学べる場所」（68歳男性）、「漠然とわかっていたことを基礎から教えてもらえる」（57歳女性）、と考える回答があった。教科学習を必ずしも不必要なものとしてはとらえていないようである。また、「高等学校教育を受け知識を広げたい」（64歳男性）、「いくつになっても勉強は大切だと改めて認識できる」（44歳男性）、というように積極的に学ぶ姿勢を表している意見もある。つまり、これまで経験で得られた雑然としていた知識を整理したり、学問的な基礎に照らし合わせ思考を再構成させる上で、学校が与える教科学習も有効に機能しているといつてよいだろう。付け加えるならば、近年の学問的進展や技術の進歩に伴って、学問内容も高度化、複雑化している。これらを学び直したり、新たに獲得するリカレント教育的な要素も含まれてくるものである。

そして、こうした教育機能を生かしている

のが、彼らの持つ特性であるといえる。つまり「意欲があれば勉強ができる」（55歳女性）、「視野が広がり、いろいろな事に挑戦してみようという気持ちになりました」（46歳女性）、「学校生活が生きがいになった」（88歳男性）、「独学では挫折してしまうが、学校があるので持続していける」（68歳女性）、というように、つねに学びを通して自己を成長させたいという欲求があることを見落としてはならない。

さらに、重要なのは、学校教育は教科活動ばかりではない。教科活動とともに特別活動や部活動などの教育活動がある。こうした活動は、人を成長させる無形の財産を包含しているといつても良いだろう。諸所の活動を通して得られた経験や役割、またそこに付随した人と人とのつながりは、自己を成長させる糧となると同時に自己実現の方策にもつながる。学校教育ではそれを組織的に行うことが意図され、生徒に働きかけをおこなっている。だが、若年層は多くの場合これを受動的に受け入れているだけである。通信制の場合は、生徒の特性もあり学校側の積極的な関与は弱く、若年層の参加はきわめて希薄になる。これに対し社会経験が豊富な中高年者の場合はこの機能を十分に把握しており、意識的に関わることを考えている。学校行事やホームルームへの参加、部活動への加入率はきわめて高い。このなかで対人的なネットワークもつくり、交友関係、教員との関係を密接なものにしている。つまり、彼らは校内での活動を広げることによって主体的に自己を発揮させ、高めているといえるだろう。

以上から、中高年の人々が通信制高校で学ぶ意義を考えてみた。そこにはこれまでの人生の補完を求めたり、自己実現の方策として

通信制高校を活用する姿が見えてきた。しかしそこでの学習は、学校教育が持つ画一的な教育を受動的に受け入れるのではなく、自己の能力、目的に即して、自発的、自立的に学ぼうとする姿勢が表れていた。そしてそれは教科教育の範疇ばかりではなく、学校の教育活動全般において経験を重視し人間的関係を構築し、自己実現を果たそうとするものであった。ここには主体的な学びを作り上げていく彼らの姿をとらえることができる。では、次章では生涯学習の観点から中高年学習者の学びを考察してみる。

Ⅲ 生涯学習の観点から考える通信制における中高年学習者の学び

中高年の人々の通信制高校での学習は、教育を受ける権利にかかわる。憲法26条では「すべての国民は、法律に定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」。さらにこれを受け、教育基本法第4条では「すべて国民は、ひとしく、その能力に応じた教育を受ける機会を与えられなければならない、人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によって、教育上差別されない」とされる。高校の学習を何らかの事情で全うできなかった人々が、年を経ても高校に入学し学習を行うことができるのは、教育を受ける権利により教育の機会が保障されているからである。そして、これにより新たな知識の獲得、人間としての成長・発達の機会が得られ、より良い生き方を求めることが可能になる。この意味で教育の機会の保障は、人間が人間らしく生きていきたいと願う基本的な権利としての意味を持つ。さらにこれまで長年のあいだ様々な苦境を経験しなければならなかった人々にとって、通信制

高校での学習は教養を得たり進学の資格を得たりするに留まらない。自己の振り返りを通じてこれまでの自己のおかれた社会構造やそこに内在する差別的な価値観を明らかにし、それを乗り越えるエンパワーメントを与えるものでもある。通信制に入学したことで「自らに自信がついた」(女性52歳及び76歳)という意見はこれを支持するものである。つまり、こういう人々にとって通信制高校での学習は、精神的な呪縛を解き放つ「人間の解放」⁴を意味するものとなる。そしてこの学びを開花させるのに重要な位置にあると考えられるのが、学校という場である。

彼らは学校に対しての思い入れが極めて強い。学校を単なる学ぶための建物ではなく、自らが帰属する場であると考えているようである。通信制は制度上スクーリングに毎週出席しなければならないわけではない。各人の選択している科目の時間だけを出席すればいいのだが、中高年の学習者はほぼ毎週登校し、可能な限りのスクーリングに出席するほど熱心である。誰に強制されているわけでもなく、自由意思により決定している。学校で交友関係を広げ、教科活動のみならず校内での諸活動に積極的に参加することで自分の居場所を作り出そうとしているようである。教員との密接な関係をつくることも学校への帰属性を高める要素である。教員と教科でのかかわり以上に密接な関係をつくることで、教員側のかかわり方も変化する。教員は面談やその他機会あるごとに個人の持っている課題をすくい上げ、客観化し投げ返すことで彼らの課題を整理させ、自己理解につなげている⁵。

同じような境遇にあった人々が互いのことを理解し合うことで、自己をより深く理解し、歴史の流れと社会構造の中に自己を位置づけ

る意識が育つことにもなる。こうしたプロセスは、自己認識のあり方であるばかりでなく、将来に向けた課題を明確にしていくことでもある。「教える－教わる」空間ではなく、相互の対話を通した学び合いの場が学校の中にでき、彼らの居場所となっている。これが彼らの学びをより豊かなものにしていくといっ

てよいだろう。

通信制高校における中高年の学習は、生涯教育の側面をもつものである。自己の経験や問題意識を結びつけ、「自己の関心や課題、内面の問題と直接向き合」ったり、学習活動の中で積極的に「他者との出会いを通じて自分を見つめ、自分と社会とのかかわりを考え、社会に参加するための自発的な学習」⁶へと展開させるという意味で生涯学習の性格が強い。学校から一方的に提示されるものを受動的に受け入れるのではなく、自発的で自立的なあり方をもとに、他者との関係の中で人間的な成長、自己実現の方途を求めることが中高年学習者の特徴と考えられる。生涯学習の特徴は生涯にわたり様々な学習の場を活用し主体的な学習を進める点にある⁷。その意味では通信制高校の中高年学習者は、学校教育の場を利用し積極的に生涯学習を実践しているといえる。中高年の学習は、知識を獲得する若年層の学習のあり方とは異なり、「ひとかたまりの知識を獲得するのではなく、存在を発展させることつまり経験を積むことによって自己実現を拡大する存在を発展させること」⁸にある。通信制課程での中高年学習者の学びのあり方はまさに、この「存在の領域」⁹を示すものといえる。

中高年の学習が若年層と違うものであることは、成人の学習を援助する技術と科学であるアンドラゴジー（andragogy）の観点から

もとらえることができる。アンドラゴジーは、学習者の特性から次のような考え方から成り立つ。①自己概念は、依存的なパーソナリティのもとから、自己決定的な人間のものになっていく。②人間は経験をますます貯蓄するようになるが、これがきわめて豊かな資源になっていく。③学習へのレディネス（準備状態）は、ますます社会的役割の発達課題に向けられていく。そして、④時間的見通しは、知識のあとになってからの応用というものから応用の即時性へと変化していく。そしてそれゆえ、学習への方向付けは、教科中心なものから課題達成中心のものへと変化していく¹⁰。これを通信制高校の中高年学習者に当てはめるならば、学校への依存的な受動的な学習から主体的な学習への発展が行われていることが指摘できる。そして、学習に際し豊かな経験をもとにして理解を深める学習を行っている。職業や暮らしなど自己の社会的な役割関心事に興味を示し、学習を行おうとする。必ずしも将来に役立つ知識ではなく即時的に応用が利く知識を求める傾向にある。そして、教科内容の学習から自分で考え課題を達成する学習への志向を強く持つ傾向にある。つまり、教科中心的に「教える－教わる」というペタゴジー的な教育を受けつつも、内在的な自己の学びを追求するアンドラゴジーの特性を兼ねていることが確認できる¹¹。若年層の学びとは違う学びの志向が中高年にはあるということが指摘できる。

以上のように、通信制高校における中高年学習者の学びは、教育の機会均等に保障されたもので、より豊かな人間性を求めて成長・発達していく機会を得ることを可能とするものである。知識の獲得に留まらず、主体的で自立的な自己実現を追求する学習を目指すも

のであると同時に、自己の振り返りを通して自らの生き立ちを認識し、生きるエンパワーメントを獲得するものであった。彼らにとって学校は単なる学習の場ではなく、類似の境遇にある仲間や教員との間で作られる居場所として機能し、彼らの学びをより豊かなものにしてくれる場なのである。中高年学習者にとって通信制高校での学びは、若年層のように知識を獲得することを主たる目的とするものではなく、自己存在を高める学びを志向しているといえる。

結

これまで通信制に学ぶ中高年学習者の学びを、彼らに実施したアンケートをもとに考察した。Ⅰでは、18項目に及ぶアンケート結果から中高年学習者の入学前の状況から入学後の学校生活のあり方までを確認した。中学卒業後または高校中退後から年月を経て高校に入学・編入学し、高校卒業を切望していることがわかった。学習上のハンディーを持っていながらも継続的に学習を行い、学校活動へも積極的に参加している姿が見えた。そこにはこれまで得ることができなかった学習や学校生活への熱い思いが表れていた。Ⅱでは、中高年の人々が通信制高校で学ぶ意義を考えるなかで、学びの目的が人生の補完を求めたり、自己実現の方策としてあることが理解された。そして学習のあり方は、自立的で自己の能力、目的に即したものであり、学校の教育活動全般において積極的に取組み、自己実現を果たそうとする姿勢があり、主体的な学びの姿を見ることができた。そして、Ⅲでは、通信制高校での中高年の学びが、知識の獲得に留まらず、学校の諸活動を通して人間関係を拡大し学校に自らの居場所を作り上げるも

ので、そのなかで自己実現を求めつつ、自己の振り返り生きる力を獲得するものであった。すなわち主体的に自己存在を高めようとする学びの姿をみてとれた。

通信制高校で学ぶ中高年学習者は、その生き立ちから高校教育を受けることができずに長年辛苦を舐めてきた人々である。年を経て希望を実現し学習の機会を得ることができたことで、積極的な学習活動を繰り広げることになる。そこでの活動は単に教育を受けるといふ受動的なものではなく、積極的に教育活動、学校活動に取り組み、人間的な関係性を広げ、学校を自らの居場所として位置づけ、自己実現を求め、主体的な自己存在を確立しようとする姿を見ることができるといえる。自己を振り返りつつそれを肯定し、現在を懸命に生きる姿には人間的な完成を求める姿勢が表れているといえる。すなわち、中高年の学習者にとって通信制高校という場は、これまでの人生を統合するために学びを行う生涯学習の場であるといえる。

注

- 1 サンプル数は小さいものであるが、同一教育機関に属する学習者の9割近い回答を得ることができた。当該校の通信制課程に通う学習者の意識を知る上では、有効な資料と考えられる。なお、回答者の男女比は女性16人、男性5人となるが、もともと中高年在学生は女性の比率が高い現状がある。ちなみに当該校の生徒年齢別在籍者数は別表ようになる。

A 高校 2008年度年齢別在籍者数

区分	通信制		
	男	女	計
15歳	12	27	39
16歳	47	79	126

17歳	82	102	184
18歳	54	66	120
19歳	32	36	68
20～24歳	61	58	119
25～29歳	9	17	26
30～39歳	15	9	24
40～49歳	1	4	5
50～59歳	0	9	9
60～69歳	3	3	6
70歳以上	1	3	4
合計	317	413	730

- 2 千代田区立神田一橋中学校(前身は一橋中学校)通信制課程にあたる。国内で2つある通信制中学のうちのひとつであり、戦後の混乱期に中学を卒業できなかった義務教育未修了者の人たちに門戸を開いている。
- 3 前身校からの転学者に限り8年が上限となる。
- 4 小林文人・末本誠『社会教育基礎論』国土社 1996年。p152
- 5 文化祭での発表や生活体験発表会ではこうした中高年の自己回顧が校内で発表され、全体的な意識の共有がなされたりしている。
- 6 佐藤一子『生涯学習と社会参加』東京大学出版会 1998年。p66
- 7 自主的・自立的な学習を進めるためには、学問の自由や思想信条の自由の保障も重要な要素となる。
- 8 ポール・ラングラン『生涯教育入門』日本社会教育連合 1971年。p51
- 9 同上 p68
- 10 マルコム・ノールズ『成人教育の現代的実践』鳳書房 2002年。p40
- 11 これは自己決定性が成人であれば必ず備わっているわけではないように、すべての場面で志向されるものでもない。